

最先端・次世代研究開発支援プログラム
事後評価書

研究課題名	日本と世界における貧困リスク問題に関するエビデンスに基づいた先端的学際政策研究
研究機関・部局・職名	東京大学・大学院経済学研究科・教授
氏名	澤田 康幸

【研究目的】

政策設計に資するエビデンスを戦略的に積み上げるための先端的なミクロ経済学分析を中核とし、公衆衛生学・防災学・精神医学等他分野の知見を融合しつつ、政府機関・NGOと連携、日本と世界における貧困問題を「リスク」とそれに対する「歪弱性」という視点から、具体的な政策介入との連携を明示し学際的な研究を行うことである。より具体的には以下の三つのテーマ・視点から研究を実施することを目的とした。

(1) 自然災害リスクと貧困

一般的な貧困リスクや自然災害リスクに対する人々の災害事前事後の行動に関するミクロデータを整備・分析し、貧困リスクを効果的に削減するための政策として、新しい災害保険制度や科学的に貧困リスク削減するための新しい技術の検証を行う。

(2) 精神健康リスクと貧困

経済状況の悪化によってその歪みを受け、高齢・若年や健常者・身体障がい者を問わず貧困層が解雇と失業・経済的困窮を通じてうつ病・自殺にまで追い込まれてしまうという精神健康リスクと貧困の問題に取り組む。

(3) 身体健康リスクと貧困

高齢貧困層や身体障がい者が病気に対する予防的投資・事後的対処を十分に行うことができず身体的健康リスクの問題から一種の「貧困悪化の罟」に陥っているという問題について取り組む。

【総合評価】

○	特に優れた成果が得られている
	優れた成果が得られている
	一定の成果が得られている
	十分な成果が得られていない

【所見】

① 総合所見

本研究課題は、分野や地域などの面できわめて多角的に展開され、研究計画は着実に実施され、また研究申請以降に起こった東日本大震災を研究対象に加えるなど、当初の計画を上回った展開をみせた。

研究成果の中には、オリジナリティが高いだけでなく、実社会への応用やエビデン

スに基づく政策・制度設計にとって有用な注目すべき成果が含まれている。目標とされている政策介入の面については、これからの努力も期待されるが、その基盤は築かれ、所期の目的・目標は達成されたと言ってよい。ただ、ブレークスルーの実現のためには、多角的な研究の諸側面をより論理的、緊密に結びつける方向が求められる。

研究成果の発表は質量ともに充実し着実である。なお、学術的な発表だけでなく、一般向けの広報活動にも力が注がれており、専門家以外の人々の理解の向上に役立っていることも大いに評価できる。

② 目的の達成状況

・ 所期の目的が

(☒ 全て達成された ☐ 一部達成された ☐ 達成されなかった)

貧困問題について、自然災害リスク、精神健康リスク、身体健康リスクの3つの見地から厳密な実証研究を行い、有効な貧困対策を検討するという明確な目的が立てられている。また各目的について、保険やリスク削減技術の検証、自殺に対する有効な政策手段の明確化、障害者政策の評価と今後の介入への提言、などが目標とされている。具体的な目標はみな現実的な政策介入の設計・実施と評価を指向したものである。現在までの成果は、ほとんどが実証研究の側面のものであり、画期的な発見を含んでいる。一方、政策介入（目標）面は、インパクトのある方向もみられるものの限定的であるが、その基盤は実証研究によって十分に築かれており、所期の目的・目標は達成されたと言える。

なお、バングラデシュおよび東日本大震災被災地に関しては、大規模調査を見送り、限定された調査を行ったが、これは状況に応じた適切な変更であったと判断される。

③ 研究の成果

・ これまでの研究成果により判明した事実や開発した技術等に先進性・優位性が
(☒ ある ☐ ない)

・ ブレークスルーと呼べるような特筆すべき研究成果が
(☐ 創出された ☒ 創出されなかった)

・ 当初の目的の他に得られた成果が (☒ ある ☐ ない)

自然災害リスクについては、中国四川や東日本大震災などのデータ解析、日本における自然災害罹災経験の研究などから得られた社会関係資本に関する様々なエビデンス、フィリピンの伝統的労働慣行の分析・再評価などについて先進性・優位性が認められる。東日本大震災復旧・復興インデックスも有用な情報を提供できている。

精神健康リスクについては、地域自殺対策緊急強化基金、青色照明の自殺抑制効果や自然災害が自殺に与える影響の分析など、具体的な自殺対策の立案にも有用な先進的な研究成果を挙げている。これらは経済学的な研究だけでは到達できない優れた学際研究である。

身体健康リスクについては、東日本大震災における高齢者の被災実態の調査、ネパールの障害者の教育収益率などの研究成果が先進性、優位性を示している。

ブレークスルーという点については、それぞれの成果は非常に優れているが、現段階ではブレークスルーとは呼びにくい。自然災害リスク、精神健康リスク、身体健康リスクの諸側面を統合する理論的視野を開くことによってはじめてブレークスルーが実現されるのではなかろうか。たとえば社会関係資本への注目など、既にその萌芽はみられるが、分析は未だに離散的なところにとどまっている。理論的統合が望まれるところである。

また、経済学以外の分野で提供されてきた仮説、主張について、経済学とそれらの学問分野において適切な協力体制を組むことによって、政策の企画立案の基盤としてのエビデンスにすることができる、ということを示した点は、政策企画立案プロセスにおけるブレークスルーに繋がる可能性がある。

なお、東日本大震災を受けて、当初の目的に加え、これに関する貧困リスクの問題に取り組み、社会関係資本の効果の実証などについて特筆すべき研究成果を挙げている。

当研究課題の成果のいくつかは、経済学以外の分野での有力専門誌に掲載されており、経済学と他の学問分野との適切な協力の有する可能性について、大きな広報効果を有する。

④ 研究成果の効果

・研究成果は、関連する研究分野への波及効果が
(■見込まれる ・ □見込まれない)

・社会的・経済的な課題の解決への波及効果が
(■見込まれる ・ □見込まれない)

東日本大災害後の被災者の行動変化が社会関係資本に与える影響、その蓄積状況が被害に与える影響など自然災害リスクに関する研究で得られた成果は、開発経済学やリスクと不確実性の研究、防災学・貧困研究において、新しい材料を提示している。また、自殺対策の定量的効果などの貢献は、精神医学、公衆衛生学・疫学など経済学と他の分野との適切な協力が大きな効果を生むことを具体的に示している。身体健康リスクについては、日本及びネパールの研究から、高齢化・障害者研究に寄与している。

研究成果はいずれも政策の企画立案に直接結びつくものというよりは、その前提のエビデンスの提供を行うものである。このため社会的、経済的課題の解決への貢献を判断するためには、おそらくもう一段の昇華が必要である。しかし非常に貴重なエビデンスの提供（たとえば青色灯設置の自殺予防効果の発見、障害者の高い教育収益率の発見、伝統的労働慣行の内的動機付けの維持の観点からの再評価等々）が行われている。

⑤ 研究実施マネジメントの状況

・適切なマネジメントが (■行われた ・ □行われなかった)

研究計画、研究実施体制は適切であり、それに基づき適切なマネジメントが行われた。災害リスク、精神健康リスク、身体健康リスクの各研究パートに担当する研究者を適切に配置するとともに、補助事業者自身が、調査設計、実施、データ解析、論文執筆などを主導的に行った。また、研究進捗管理、予算の配分や執行の面でもリーダーシップを発揮したことが窺える。研究対象の変化に応じた調査内容の変更も適切に行われた。助成金の使途等や指摘事項への対応も問題がない。

研究成果の発信の面では、研究成果の第一義的な発表の場である英文ジャーナルを中心とする専門誌に、累積で 44 件（査読つき掲載済みは 22 件）の論文を掲載しており、補助事業の規模からみて十分な量的成果を挙げていると評価できる。そのうちのいくつかの論文は、経済学のみならず、他の（精神医学や公衆衛生学）分野の有力専門誌に掲載されており、付加価値の高い研究成果が出ていることを示しており、大きな成果と言える。

会議発表については、専門家向けが累積で 69 件と報告されており、この一部は今後雑誌論文として掲載されることが期待される。また、一般向け会議発表が累積で 15 件ある。これは、研究成果を、専門家だけでなく、一般社会向けにも広報する努力がなされたことを示している。

研究書・啓発書をすでに合計 6 件刊行しており、研究成果の再整理や一般向けのアウトリーチという点でも意義があると考えられる。

国民との科学・技術対話については、公開のカンファレンス、ワークショップを、予定を含め累計 14 件実施し、新聞紙上で取り上げられたものも複数あり、一定の効果を挙げていると評価できる。